

巻頭言

はたして未来に希望はあるのか

現代宗教研究所所長 三原正資

東京電力福島第一原子力発電所事故被災警戒区域に入る。Jヴィレッヂが近づくと車を空き地に入れ、私たち全員はゴーグル、マスク、デュポン社製の白い防護服を慣れない手つきで身につけた。お互いの姿形をみて笑ったが、私はある映画のシーンを思い出していた。

昭和五二年（一九七七）に公開されたバート・ランカスター主演の映画「カサンドラ・クロス」（アメリカ）は細菌兵器の恐怖を描いたものだった。細菌に感染した乗客を乗せた列車が駅に入ると、防護服を着用し銃を持った兵士が列車をとりかこむ。強いライトに照らされ夜の闇の中に浮かび上る白い防護服が印象的だった。

さて、その日、平成二四年（二〇一二）五月九日午前八時、私たち一行はいわき市大寶寺・福島県宗務所に集合した。小林智英同所長、武田寿法師（同県富岡町妙栄寺住職）、瀬戸隆寿師（双葉町妙勝寺副住職）、日蓮宗宗務院から塩崎望巳総務局長、現代宗教研究所から私と櫻井義久所員、山口功倫所員、そして、日蓮宗新聞社から井波宏之師の八人。武田師と瀬戸師の二台の車に分乗した。フロントガラスの内側には「公益法人立入許可証」が置かれる。

Jヴィレッヂ近くの検問所で検問を受け、車は福島第一原発（双葉郡大熊町）二〇km圏内へと向う。閉め切った車窓から初夏の太陽に光る若葉でおおわれた山林を眺めていると、突然、線量計の警報音が車内にひびきわたった。

各自携帯を義務づけられている中国製やウクライナ製の線量計の数値が毎時〇・四マイクロシーベルトを超えたのだ。（ちなみに、今朝、偶然目にしたいわき市内の公園に設置されていた線量計は0・一九六マイクロシーベルトの数値を示していた。）

車内には四つの線量計の警報音が次々となりひびき、その数値は上昇していく。私の腕にとめておいた線量計は原発がある大熊町では毎時二二マイクロシーベルトを示した。これは年間被曝量に換算すると一七〇ミリシーベルトを超える。一般人平常時の被曝限度は年間一ミリシーベルト、国の除染基準は毎時〇・二三マイクロシーベルトである。私は底知れない不安を感じた。

窓に目をやると、三km程向こうに第一原発の排気塔が見えた。道路沿いには衣類のチェーン店「しまむら」や自動車販売店が並ぶ。「しまむら」のマネキンは洋服をまとい、販売店には色とりどりの車が並んでいる。今にも街は動き出しそうだが、人の姿はなく静まりかえる。

九時すぎには双葉町妙勝寺に着いた。寺名の刻まれた門柱がよこたわっている。瀬戸上人の案内で庫裡から本堂へと入る。仏具は倒れ、震災当日のままとのこと。寺を出て双葉町の街路を歩くと、両側の家屋は激しく倒壊している。一年余り前の三月一日で時間が止まったように静かだ。

私たちが立ち入りを許された時間は二時間。急いで富岡町妙栄寺へ向かった。桜並木が美しい通りに沿って進むと妙栄寺があった。堂内に入るとすでに雨水がたまっていた。

三菱重工爆破事件（一九七四年）の実行犯大道寺将司は句集『棺一基』（太田出版 二〇一一年）によんでいる。

福島の無人の町に散る桜

原発に追はるる民や木下閣こしたやみ

日盛りの地に突き刺さる放射線

富岡駅へ行った。津波に襲われた駅は警戒区域内のために人の手が入っていない。線路上には津波で運ばれた車がよこたわり、その向こうには震災直前に分譲が開始された住宅地が広がり、数戸の真新しい住宅が残っている。新居に入らずにローンだけが残った人や、現住所を移していないために賠償金を請求できない人もいるという。多くの悲劇をのこして無人地帯が広がる。

武田上人と瀬戸上人は「私たちは現在の放射線量では富岡や双葉へは帰れません。政府ははっきりと方針を示してもらいたい」と語る。

私たちは富岡駅を離れ、検問所を経て、昼頃、Jヴィレッジでスクリーニングを受け防護服をぬぎ、大寶寺へと帰った。

今なお信じたくないことだが、防護服をきて、時の止まったノーマンズランドを歩くとい

う事態が、この日本で現実に起こったのである。

作家水上勉氏（一九一九―二〇〇四）は、「若狭の在所に、十五も原発が集中し、そのどまん中に、図書館を建てて、書齋をつくった」と昭和六三年（一九八八）に述べている。水上氏はそのころ火葬場さえない村の若州一滴文庫にあつて、チェルノブイリの事故（一九八六年）のあと、次のように述べていた。

早い話が、もし、チェルノブイリのようなことが起これば、ぼくの兄弟や子どもたちの逃げ場がない。逃げていっても先に原発が待っていて、敦賀から舞鶴までの海岸の一本しかない国道は、つねでさえ、車の洪水で事故も多発しているのだ、とても、避難民が逃げ切れるとは思えない。チェルノブイリの事故が起きてから何とか若狭へ帰った。いろいろな友人にも逢った。みんな、口をそろえて、恐怖を語り、不安を語り夜おそくまで話した。チェルノブイリの事故から二五年、水上氏が恐れていた事故が日本で起こった。情報を知らされない福島県の住民は放射性廃棄物を浴びながら逃げ惑うほかなかった。メルトダウンした福島第一原発の将来は全く見えない。それにもかかわらず、進まない被災地の現状を見ながら、トウキョウはフクシマの事故はなかったかのように増殖・拡大している。

私たちはいま、都会で、ボタンを押して湯をわかし、ボタンを押して風呂に入り、蛇口をひねって、水道の水をふんだんに使い、足さえつかわずに高層マンションの居室へ帰る

日常を、当然のこのように思っているが、じつは、このぜいたくな生活がつづけられるのも、ゲンパツと人のよぶ原子力発電所から、一日の約三分の一の電力をおくってもらっているからで、そんなことを、じっくり考え込みもしないで、めまぐるしい競争社会を、とにかく今日よりよくなるうと、明日に向かって、必死に喘ぎ生きている。

と水上氏が記して二〇年あまり、事故を経験した私たちの生活が変わったといえようか。日本各地に原発は一七カ所、五四基の原子炉がある。再び巨大災害が起り、原子炉に異常が生じれば、私たちは逃げなければならぬ。

地域に原発が林立する若洲一滴文庫で水上氏は、『閑話一滴』の〈あとがき〉を次のように締めくくっていた。

考えることは死だ。いつ大事故に見舞われても、悠々と死んでゆける気持ちで育てていなければならぬ。

私たちの子どもたち、さらにその子どもたちの未来を考えると、悠々と死んでゆく気持ちにはなれないだろう。

ゴーグルや防護マスク、そして白い防護服を着用し、銃をもつ自衛隊員に取り囲まれ、指示される道を着の身着のまま、トボトボと避難することにならなければよいが。暗い、希望のない未来でないことを祈るばかりだ。